

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370301123		
法人名	有限会社 翔和		
事業所名	グループホーム 日だまりハウス別館		
所在地	岡山県津山市桑下1316-1		
自己評価作成日	平成28年 3月17日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=3370301123-00&PrefCd=33&VersionCd
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート		
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館		
訪問調査日	平成28年 3月 30日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・ 利用者が共同生活において、家庭的な環境の元で入浴、足温、散歩、排泄、食事等、その他日常生活上の掃除や食事作り、洗濯物等の生活リハビリを行うことにより、利用者のその有する能力に応じ機能の回復又は低下の防止に努め、自立した日常生活を営む事ができるよう援助する事を目的としています。
事業所併設の日なたぼっこ(お食事・植物工場)をオープンし、利用者の外出支援も頻繁にでき、顔なじみの地域の方との出会いもあり、地域密着型事業所としての役割を果たしていけると思います。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

社長の保有する広大な敷地内に日だまりハウスの本館と別館があり、会議やイベントを合同で行い、近くにある小規模多機能ホームと3施設で協力しながら地域に根差した活動に取り組んでいる。利用者の高齢化・重度化も進み、顔馴染みも一人また一人と入れ替わり、囲碁が打てる仲間が出来たと喜んでいて101歳の男性利用者も家族の意向等、諸事情により、心を残しながら他施設へ移行した。利用者の溢れんばかりの惜別の想いを汲み取った社長は、故郷に帰るのが夢だったその人と自宅までドライブし、一足早い誕生日を外食を共にして祝う等、ホームを去る前日まで心のこもった支援をした。介護の経験年数や年齢により職員のスキルにも幅があり、このホームでは職員が自分で考えて、利用者一人ひとりのプランに対して目標・援助・理由の3項目の「自立支援目標」を作り、自分で出来るケア目標を実践し、半年ごとに自己評価して次へのステップにつなげている。社長や管理者は「職員の考える力」を育てることに重点を置き、スキルアップを支援している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の介護理念に基づきサービス提供している。	「主役はご利用者様です」というこのホームの理念を事務所に掲示し、一人ひとりの残存能力を見極め、生活の中でリハビリをしながら、ゆったり自由な暮らしを楽しんでもらっている。開設当初からの理念はぶれることなく着実に職員の中に浸透している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩時など積極的に挨拶、会話をして近隣の方と接して普通の田舎暮らしをしている。地域のイベントに積極的に参加させて頂いている。地元の健康教室への参加もしている。	日頃から近所の人とのつき合いや「とんど」等の町内行事へ参加をしている。秋祭りには、だんじりや子供神輿の立ち寄りがある。音楽や手品、語り部のボランティアの訪問、中学生の職場体験、小学校の学習発表会、中学校の文化祭の見学等、様々な地域交流を積極的に行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所内でのイベントに参加していただき、楽しんで頂いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回運営推進会議を開催。委員より意見を頂いたり、情報交換を行っている。利用者・家族にも参加して頂き、直接意見を頂いている。	本館・別館合同で運営推進会議を開催し、市の担当者、町内会長、老人会長、家族等の参加がありホームの活動報告や意見交換をしている。年1回以上は家族へ参加をお願いし、会議と一緒に勉強会も行っている。場所は交互に開催し当ホームで開催の時は利用者も参加している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所(担当者)へ度々報告、連絡、相談をしている。	運営推進会議には市の担当者の参加があり、日頃からホームの活動を理解してもらっている。何かあれば直接相談したり、電話等で助言や指導をもらっている。市民後見人を依頼しているケースもあるので、密に連携を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的にマニュアルの確認を行っている。利用者が外へ出ようとした場合、本人が納得のいくまで散歩に付き添うようにしている。職員は鍵をかける事の弊害を理解しており、鍵を掛けることを不自然な事と理解している。	玄関に施錠はなく出入り自由だが、安全確保の為にセンサーを設置している。外に出たい人には職員が付き添って気分転換をもらっており、離脱した場合に備えて捜索用の写真を作成しているが、実際に使用したことはない。身体拘束に関する研修をして職員間で周知徹底をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法についての勉強会を行い、職員間で認識している。利用者の話を聞いたり、身体の傷等がないか注意している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設外の研修会に参加したり、施設内でも月1回、勉強会を開いている。必要な利用者家族には情報提供している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に本人・家族より希望を聞き、事業所として援助できる内容を伝え、理解・納得して頂けるように努力している。変更事項・介護計画等を本人・家族に解りやすいように説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族との会話の中で要望等を拾い上げるように心掛けている。気付いた事は、スタッフ間の共通認識とするようミーティングを行っている。	面会時には状況報告をし、家族から意見・要望を聞くようにしている他に、毎月「日だまり通信」を送付し、写真や手紙で生活の様子を伝えている。新しく入った利用者から職員の名前が分からないという声がありネームプレート(名札)を作った。本人や家族からの意見・要望は運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	経営者と従業者が参加するミーティングを行い、事業会社全体の運営に関する方針を決定している。	毎月職員会議をして勉強会やヒヤリハットの原因分析・対策等について意見交換をしたり、業務に関する自己診断を行い、職員の考える力を育成している。社長と職員、職員同士の仲が良く何でも話し合える間柄になっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員のケアの良い所等評価している。職員の意見を聞く様な機会を職員会議で行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会、資格取得の案内や参加等を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設内の行事、イベント等に参加させて頂いたりして交流を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人とゆっくり話す時間を持つたり家族に協力して頂き、本人の要望や不安な事がないか聞いて頂くよう心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面会時や電話等を行い、家族と話ができる機会を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族や関係機関(主治医や他事業所のケアマネージャー等)から情報収集したり、必要なサービス支援について話し合う機会を作っている。ニーズを挙げ、優先順位を決めて対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人のペースに合わせてスタッフはサービスを行っている。傾聴し表情を見てゆっくりコミュニケーションを図る時間・環境を設け、信頼関係を築く努力をしている。 (22・目標計画達成)		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員、代表者等、常日頃家族へ困ったことや悩んでいる事がないか伺い傾聴。信頼関係を築く努力をしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	住み慣れた地域で一緒に出掛けたりと近隣の方との交流、関係が途切れないよう支援を行っている。又、知人等来やすい場所作りをしている。	ホームに入所している利用者同士が顔馴染みの関係になり、囲碁の打てる仲間も出来て喜んでいた人が、諸事情により退所する事になり、社長・職員と自宅までドライブに行ったり、懐かしい場所で外食して誕生日を祝う等、素敵な思い出作りをした。日頃からそれぞれの利用者に家族や知人の面会があり、関係継続の支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が気軽に話ができるようにスタッフが間に入り、交流の場を設けて支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスを終了しても家族と関わりを持ったり、施設又は入院されている利用者に面会したりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	コミュニケーションを図り傾聴する。表現が難しくなっている方の場合には気持ちに寄り添えるように、その時々のお気持ちを敏感に感じとり、対応できる様、常に様子や表情を気にするようにしている。	自分が職員と思っている人には、職員会議の時に同席してもらう等、意識が高揚するような対応をしてその人の気持ちに寄り添い、寂しがり屋でリビングでの集団生活を希望する人には思いを共有する等、一人ひとり、その人らしい生活が継続出来るように支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの人生・生活歴・性格等情報収集に努めている。日常会話や行動等から、より詳しい過去の出来事等把握し、新しい情報等はスタッフ間で共有するように心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの日中の過ごし方を把握することで、より効果的な声掛け・対応ができていると思われる。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族から情報収集をし利用者の心身の状態の変化や、ケアプランに修正を加えるようなときにはスタッフ間にて意見を出し合い、それをケアプランに反映するようにしている。	利用者の担当職員がアセスメントし、計画作成担当者として話し合いながらプランを作成している。プランの目標を簡潔に設定し、生活記録表にプランの日々の評価を記入して課題を抽出し、定期的にモニタリングをして次のプランにつなげている。	各職員ごとに自立支援目標を掲げ、各利用者のケアプランに添って職員が自分の能力の範囲で出来るケアを目標としている。それによりモチベーションも上がり、次のステージへのステップアップにつながっている。とても良い取り組みなので是非継続して下さい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録や職員連絡ノートを使い、再度徹底し、スタッフが関わる際に統一できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の希望や急な要望にも柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の情報収集に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診時は日頃の身体状態の情報をかかりつけ医や家族へ報告している。	かかりつけ医の2週間に1回の往診があり、受診は職員が同行している。受診結果や病状に変化があれば看護師(職員)が家族に電話等で報告し、日頃の健康管理もしている。かかりつけ医は365日24時間いつでも対応してくれるので安心して生活できる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師との報告連絡を取りながら利用者のケア・健康管理に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	利用者が入院した時、定期的な面会をしている。早期に退院できるように退院前のカンファレンスを持ち、利用者にとって一番良い受け入れ体制を作るよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者は高齢であり、いつ何が起こるか分からないので事業所内で出来る支援は何か、職員の認識を統一している。	開設以来多くの看取りを経験し、今もこのホームで人生の最期のステージを送りたいと希望している人がいる。高齢化・重度化している人も多く、入所時に終末期に関するホームの方針を説明しているが、昨年も本人の切なる希望に添えず、家族の意向で特養に移行した例がある。医療連携も整っているので希望があれば今後も出来る限り支援していこうと思っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故発生時の対応方法は勉強会等で定期的に行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害対策マニュアルの作成を行い、定期的にマニュアルの確認を行っている。消防訓練を実施している。	定期的な避難訓練を実施し、避難ルートの確認や移動手段等も話し合っている。社長の息子さん(職員)が地元消防団員であり、防災意識が高く緊急時の連携体制も整っている。社長が作る自家製の味噌や米など常に備蓄があり、地域との協力体制も出来ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	記録等の個人情報の取り扱いについては保管場所へ置き、外部へ持ち出さない。対応についても一人ひとり尊重した声掛け対応を行っている。	精神疾患が原因で自室に鍵をかける人がいるが、自主性を重んじその人の自由にしてもらっている。オシメ交換に抵抗感のある人への声かけや対応等、利用者一人ひとりの思いや誇りを大切にしながらも、羞恥心やリスク回避には十分な配慮をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃から希望等言いやすい関係づくりをしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの希望を伺い本人のペースに合わせ、ゆったりとした時間を過ごして頂けるよう配慮し、趣味と特技を生かせるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々に合わせて身だしなみをしている。訪問理容等も利用している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好調査を行い、利用者に合わせて食べ物の量・形など工夫し、食事を提供している。食事の準備・配膳なども一緒にして職員も同じテーブルで食べ、ゆったりした雰囲気の中で食事が出来るよう配慮している。	食事はホームの菜園の旬の野菜や敷地内で収穫する果物等を使い、毎日職員が手作りしている。収穫した柿を「つるし柿」にしたり、「ずくし」を食べて喜ぶ利用者もいる。祭りや正月には餅を食べる楽しみがあり、屋外でラーメンを食べる、家族持参の松茸たっぷりご飯を作る等、たくさんの楽しみがある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	嗜好調査を行い、一人ひとりに合わせて食べ物の形状等工夫し食事を提供。個別に食事量のチェックを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後、個別に口腔ケアの声掛け・見守り・介助をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンの把握を行い、排泄ケアを行っている。本人の身体状態に合わせ、下着、オムツ等の使用変更を行っている。	バルーン装着やストーマの人もいるので、清潔保持に気をつけながら介助している。自立歩行できる男性利用者も全員トイレ座位での排泄を基本としており、個々の排泄リズムを把握し適宜、声かけ誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘傾向であれば、水分補給を促し、また、適切な運動の声掛け・支援、腹部マッサージを行い排便を促す工夫を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	その日の体調・身体状況・気分を察知して柔軟に対応している。	出来る限り湯船につかるようにしてもらっているが、皮膚疾患がある人や便汚染がある場合にはシャワー浴や清拭で対応している。毎日の入浴を基本としているが、入浴拒否がある人には無理強いないで、時間をずらしたり複数の職員で対応し、事故につながらない介助を心がけている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その日の状況に応じて散歩・昼寝等をしている。夜間の睡眠の妨げにならない様に配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	スタッフ間で服薬内容説明書の把握を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の希望に沿った生活リハビリ等が出来るようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの要望に合わせ個別に外出する支援を行っている。定期的に季節毎の行事を企画開催している。利用者の希望を聴取し、実現可能な範囲で計画している。	日頃から外出支援をよくしており、花見へ出かけたり初詣は全員参加で行くことが出来た。全体では難しいが行ける人は外食にも行っている。近くの食堂で昼食を食べたり、ポストへ郵便物の投函に行く等、散歩を含め日々の外出が生活リハビリになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金の所持については、個々の能力に応じて家族や本人の要望を聞き対応を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	窓を大きく取り、昼間は自然光を多く採光している。また、外の景色を眺めて季節感を味わっている。	リビングに数個のテーブルを適度に配置し、座る位置もその人の心身の状態に合わせて決めている。会話が弾む仲良しの男性利用者が相次いで退所となり、全体的には静かな感じがするが、利用者同士で会話をしたり、エプロン姿で職員の手伝いをしている人等、日中は殆どの人がリビングで過ごし居心地の良い空間になっている。	「生活リハビリ」と「リハビリ」は違うと職員から聞いたが、高齢化・重度化が進み集団レクは難しくても、脳トレ、ぬり絵、体操等のその人の出来る範囲での個別レクをもう少し充実させても良いのではないかと思う。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	思い思いに過ごせる時間・空間・環境を整え、落ち着いた雰囲気でも過ごして頂けるよう工夫、支援を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	必要な物品は家族・本人の希望によって持参している。	夫婦入居用が2部屋あるが、現在は単独入所の9名であり、座位保持の難しい人の居室には、柱の角や壁際等に転倒時の安全対策の工夫がしてある。和室と洋室があり、これまでの生活習慣を継続し毎日布団を押し入れに片づける人いる。状態に合わせて机と椅子の位置を試行錯誤しながらセッティングしている居室もある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一般的な家庭環境をベースとしているため、特殊な介護設備は設けていない。屋内でもシルバーカーや、歩行器を使用可能とし、職員の見守りと介助で対応している。		